ジブリアニメと中国

夢はバラ色

劉　　文　兵*

Ghibli movies in China

Key Words：Animation, Studio Ghibli, Hayao Miyazaki, Toshio Suzuki, Yasuyoshi Tokuma

2024年はジブリにとっても中国のジブリファンにとっても特別な年だった。4月に中国で一般公開された『君たちはどう生きるか』（日本公開2023年）は7.91億元（約160億円）の興行収入を上げ、2018年に中国で公開された『千と千尋の神隠し』の4.81億元（約100億円）を超え、中国における歴代ジブリ作品の興行成績の第一位となった[1]。

日本国内での公開と間を置かず、中国での一般公開に踏み切ったというタイムラグの少なさはヒットの要因の1つであり、鈴木敏夫プロデューサーはキャンペーンの際に上海に駆けつけ、宮崎駿も中国の観客向けのビデオメッセージを寄せるなど、ジブリは中国でのプロモーションに力を入れていることは大きいだろう。さらに、『君たちはどう生きるか』の公開に合わせて、「スタジオジブリ物語展」は上海で開催され、ジブリ作品の名シーンを、最新のデジタル技術を用いて再現した「没入アート」は中国のファンを魅了し、大きな話題を呼んだ[2]。

だが、ジブリアニメが中国国民から圧倒的な支持を得るに至るまで紆余曲折があった。

ジブリ作品の不運

中国でのジブリ作品の上映は1990年代初頭に遡る。すなわち、それぞれ1991年、92年、93年に立て続けに中国で一般公開された『天空の城ラピュタ』、『となりのトトロ』、『風の谷のナウシカ』だった。

しかし、当時の中国では「アニメは子供が見るものだ」という考えが一般的で、3作品とも中国での反響はほとんどなかった。一般観客のみならず、中国のアニメーターたちも、これらのジブリ作品には関心を示さなかった。1984年に「上海美術電影制片廠（上海アニメーション映画製作所）」を、高畑勲、亀山修三とともに訪問した宮崎駿自身も、それを感じ取ったようだ。

1960年代まで世界の最先端だった上海アニメに対して憧憬の念を抱いた宮崎一行は、『風の谷のナウシカ』を手土産に中国のアニメーターたちとの交流に臨んでいたが、その熱い思いが裏切られた。中国側はもっぱら日本のアニメーターの報酬制度に興味を示していた。それ以前の上海アニメは、国の全面的なバックアップのもとで、採算を度外視して制作されたクオリティの高い大作ばかりだったが、市場経済へ移行しようとしていた1980年代に至ると、中国のアニメたちは、定額の報酬制度に不満を持ちはじめ、「原画1枚いくら。動画1秒いくら」という日本式の歩合制を導入しようとしていた[3]。

宮崎駿の再発見

中国人が宮崎駿を「再発見」したのは、1990年代後半以降であり、また皮肉なことにそれが海賊版を媒介したものだった。

周知のように、1990年代後半の中国では海賊版ディスクが横行し、2000年以降はインターネットの普及とともに違法アップロードも後を絶たなかった[4]。

そのなかで、ジブリアニメのファンたちが電子掲示板をつうじて集まり、ダウンロード情報を交換し、

* Wenbing LIU
1967年10月生まれ
現在、大阪大学　人文学研究科
准教授　博士（学術）
専門／映画論、表象文化論
TEL：072-730-5245
E-mail：ryuw.hmt@osaka-u.ac.jp

作品の感想を共有することによって、宮崎駿作品の幅広い安定したファン層が形成された。そして、宮崎駿作品の世界観と奔放なイマジネーションは、繊細な作風と卓越したテクニックをつうじて、幅広い観客層に深い感動を与えた。ちょうどその頃に、アニメーションは単なる子ども向けの教育的な小品から、娯楽性と芸術性を重ねもつ大衆文化のメジャーなジャンルへと変化したが、その大きな転換を遂げるには、宮崎駿の果たした役割はきわめて大きい。

中国人の見方の変化

すでに言及したように『となりのトトロ』は1992年にすでに中国で公開された。しかし、当時の映画評論と一般観客の反響は皆無だった。だが、2017年にこの『となりのトトロ』は中国で再上映されると、1.73億元（約350億円）の興収を稼ぎだし、ヒットした[5]。また、同じ1990年代の中国で公開された『天空の城ラピュタ』も2024年に再上映され、1.35億元（約280億円）の興収をあげた[6]。

旧作の再上映というばかりでなく、現在、『となりのトトロ』と『天空の城ラピュタ』はネットでも簡単に鑑賞できる「古典」であるにもかかわらず、なぜ中国人観客は映画館に足を運んだのか。中国人の反応の劇的な変化の背後には、中国の消費文化におけるアニメーションの位置付けの変化にくわえ、さらに中国映画市場の急拡大があった。

中国版『となりのトトロ』のポスター

中国映画市場の巨大化

1993年に一般公開された『風の谷ナウシカ』を最後に、そのあとの14年間、日本アニメは中国でまったく劇場公開されなかった。再び中国のスクリーンに登場したのは、2007年に公開された『映画ドラえもん のび太の恐竜』（2006年）である。

その頃から中国映画市場は大きく成長した。2006年から2011年までの5年間で、年間映画興行収入は5倍にまで増加し、2014年に日本を抜いて世界第二の映画市場になり、2017年の時点で1兆円以上の市場規模を有するに至った。ジブリ作品の放映権を購入し、それを配給する力を中国側はしだいにもつようになったわけだ[7]。

中国人のメンタリティーの変容

同じジブリ作品にたいする中国の観客の対照的な反応には、その間、彼らのメンタリティーに起きた大きな変化が投影されている。たとえば、1992年頃に『となりのトトロ』が中国で初公開された際に、作品に描きだされた「田園風景」や「純粋な童心」に立ち戻ろうという一見、退行的な欲望が、改革開放が始まったばかりの当時の中国人に理解されなかったように思われる。

しかし、その後、経済急成長の時代に突入した中国では、経済成長期の日本の軌跡をたどっているかのように、都市化が進むにつれ、田園風景が消えるいっぽう、競争社会で勝ち抜けなければならないというプレッシャー、あるいは夢と現実のギャップに由来する社会的フラストレーションばかりが大きくなるいっぽうであった。消え去った田園風景、失われた童心に対する強いノスタルジーが次第に中国人の間にも生まれてきたのである。恐らく多くの中国人は『となりのトトロ』の世界観に身をもって共感できるばかりでなく、今日の日本人以上に郷愁を誘うのかもしれない。

そのいっぽう、姉妹が家族と共に都市から農村に移住するという物語、そして異界を媒介とすること

によって浮き彫りにされた都市と農村の相対関係、ユートピア的な農村というイメージにたいしても、1990年代初頭の中国で幅広い共感を得られなかっただろう。当時、近代化の過程において都市と比べ、農村は遅れたものとして捉えられていたからである。しかし、近年に至ると、中国の人々にとっても『となりのトトロ』に提示された都市開発の脅威や自然保護の必要性といったテーマは、自ら抱えた切実な問題として身近に感じるようになったのではないだろうか[8]。

徳間康快の功績

ジブリと中国とのかかわりは、初代社長の徳間康快（1921～2000）を抜きにしては語ることができない。上海で開催された「スタジオジブリ物語展」においても、鈴木敏夫・現社長の強い意思によって、「ジブリと中国のご縁ー初代社長・徳間康快」のコーナーが設けられた。

徳間グループを一代で築き上げた徳間康快氏（1921～2000）は、1984年に宮崎駿を大抜擢して、『風の谷ナウシカ』を製作し、彼の才能を開花させた。1985年には自らスタジオジブリを創設し、1996年に「徳間インターナショナル」を立ち上げ、『もののけ姫』（1997）以降のジブリ作品の世界進出を成功させた。

また、初めて中国のスクリーンに登場したジブリ作品『天空の城ラピュタ』は、1990年に徳間康快が中国側に提供したもので、『となりのトトロ』（当時の中国語題は『隣居托托羅』）は、徳間康快が中国の子供へ贈ったプレゼントだった。中国版の冒頭では「日中国交正常化20周年を祝うため、日本徳間グループ社長の徳間康快さんは本映画を中国の子供にプレゼントした[9]。ここで慎んで徳間康快さんに感謝の意を表する」の字幕が映しだされている。これらは間違いなくその後、中国を席巻したジブリブームの礎となった。

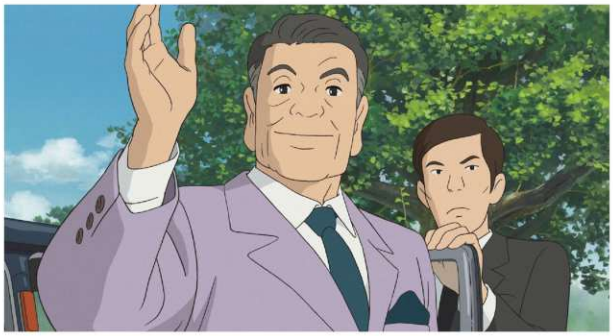
同展覧会においては、日中の文化交流、とりわけ映画交流に尽力した徳間の功績も紹介されている。1970年代後半から、彼は中国側と手を携え、日中映画交流の新天地を切り拓き、中国との交流事業を専門的におこなう「東光徳間」を設立した。1978年から1991年にかけて毎年、中国において日本映画祭を開催し、映画祭で上映された7～8本の日本映画はその後、中国全国へ配給され、空前の日本映画ブームを引き起こした。『君よ憤怒の河を渉れ』（1976）、『望郷 サンタガン八番娼館』（1974）、『愛と死』（1971）、『砂の器』（1974）、『遙かなる山の呼び声』（1980）はある世代の中国人の共通した記憶となった[10]。

中国映画祭のセレモニーでスピーチをおこなう徳間康快

それと同時に、1977年から彼が主催した中国映画祭も日本で幕を開け、その後、20年も続いていた。映画祭開催中には日中の映画人の相互訪問もおこなわれた。その中で、徳間書店の子会社である「東光徳間」は中核的な役割を果たした。

映画祭の開催にとどまらず、徳間康快は日中合作映画の製作にも精力的に携わり、初の日中合作映画『未完の対局』（1982）が、徳間書店傘下の大映と北京映画撮影所のコラボレーションのもとで製作された。この映画は両国で公開されると、大きな反響を呼んだ。その後の日中合作映画『敦煌』（1987）も興業的成功を収め、両国でセンセーションを巻き起こした。

さらに日本ロケを敢行した中国映画『炎の女 秋瑾』（1983）、『廖仲愷』（1983）、そして謝晋監督の『阿片戦争』（1997）に対して、徳間康快は撮影、または配給において協力を惜しまなかった。徳間康快は採算を度外視し、これらの日中映画交流の巨大プロ


徳間康快をモデルとした『コクリコ坂』の徳丸理事長

「スタジオジブリ物語展」を見学する筆者

ジェクトを次々と立ち上げ、日中交流の立役者として大きな足跡を残した[11]。

長年にわたって、日中映画交流史研究に携わってきた筆者は「スタジオジブリ物語展」の一部である徳間康快のコーナーを監修した。

参考文献：

1 映画専門サイト「猫眼票房専業版」のデータベースによる（最終確認日：2024 年 11 月 10 日）／「プロフェッショナル　仕事の流儀 ジブリと宮崎駿の 2399 日　宮崎駿と青サギと… ～「君たちはどう生きるか」への道～」、NHK、2024 年 5 月 9 日放送

2 「スタジオジブリの没入型アート展　世界に先駆け上海で開催」、人民網（日本語版）、2024 年 4 月 19 日、http://j.people.com.cn/n3/2024/0419/c94475-20159001.html（最終確認日：2024 年 11 月 10 日）

3 「特集：中国アニメーション 座談会（古川タク、高畑勲、大塚康生、宮崎駿）」、『アニメージュ』1981 年 6 月号、徳間書店

4 「原来宮崎駿是因為曽経的盗版横行而不喜歓中国」https://www.douban.com/group/topic/143881625/（最終確認日：2024 年 11 月 10 日）

5 映画専門サイト「猫眼票房専業版」のデータベースによる（最終確認日：2024 年 11 月 10 日）

6 映画専門サイト「猫眼票房専業版」のデータベースによる（最終確認日：2024 年 11 月 10 日）

7 拙稿「『君の名は。』のヒットと巨大化した中国映画市場」、https://animeanime.jp/article/2016/12/20/31856.html#google_vignette（最終確認日：2024 年 11 月 10 日）

8 拙著『日本の映画作家と中国　小津・溝口・黒澤から宮崎駿・北野武・岩井俊二・是枝裕和まで』（弦書房、2021 年。49 頁～ 64 頁）を参照していただきたい。

9 「徳間公司贈送動画片」、『中国銀幕』1992 年第 4 号、30 頁

10 拙著『日中映画交流史』（東京大学出版会、2016、155 頁～197 頁）を参照していただきたい。

11 拙著『映画がつなぐ中国と日本　日中映画人インタビュー』（東方書店、2018 年、179 頁～ 214 頁）をご参照いただきたい。